2026_1022「子どもたちが発見した巨大なキノコ」日々の理科 4456 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

子ども園の子どもたちが、興奮した様子で私のところに駆け寄ってきました。「博士！大きなキノコがありました！」。どのくらい大きいのか尋ねると、両手をいっぱいに広げて、その大きさを説明してくれます。子どもたちの話には多少の誇張があるものですから、最初は半信半疑でした。それほど大きなキノコなら、ひょっとすると巨大な球形になる「オニフスベ」かもしれません。そんなことを考えながら、さっそく確認しに行きました。

ところが、そこにあったのは予想もしなかった光景でした。なんと、無数のカワラタケが幾重にも重なり合い、巨大な塊を形成していたのです。灰褐色の小さな傘には白い縁取りがあり、まるでレース飾りを重ねたような美しさです。そして驚いたことに、その塊は確かに幼児が両手をいっぱいに広げたほどの大きさでした。子どもたちの説明は、決して大げさではなかったのです。

カワラタケは、枯れ木や倒木などを分解する典型的な木材腐朽菌です。おそらく地中に埋もれた何かの切り株全体に菌糸がまん延し、木材を栄養源として、これほど巨大な子実体の集合をつくり上げたのでしょう。普段は倒木などに小さな傘を並べるカワラタケですが、これほどの規模になると、その分解能力のすさまじさを実感します。何より感心したのは、この自然界の不思議を見逃さず、私に知らせに来てくれた子どもたちの観察眼でした。身近な大学構内にも、まだまだ驚くべき発見が隠されているのです。

（2026 年 10 月下旬／お茶の水女子大学構内）

